

提 言

“Reproduction”の射程

宮原 忍 (日本子ども家庭総合研究所)

「学問に国境はない」という言葉は、かつては学問にたずさわるものの理念を表わした標語であったが、今や国際学会がどの領域でも林立し、わが国でも開催されることが多いので、単なる事実の表出に過ぎず、過去のインパクトを失った。しかし学術用語は、苦勞してギリシャ語やらラテン語やらをひねくり回して作り上げた新語は別として、それぞれの国で用いられている言葉は、日常用語としての意味や、他の領域での用法などが絡まって、それほど国際的ではない。

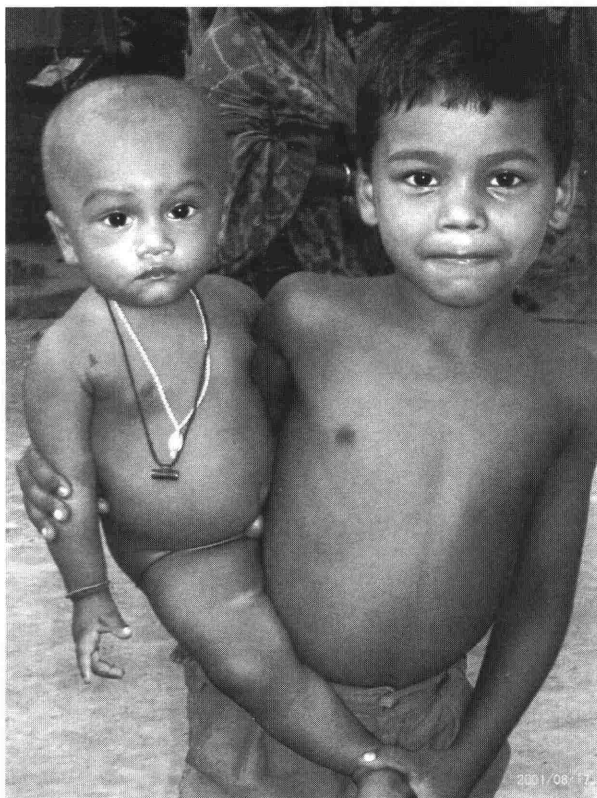
私の若いころ、医学の書店の棚で、“Culture and Development”という本を見つけ、文化が違えば、子育ても違い、「発達」に違いが出るのだらうと勝手に想像して、手に取ったところ、経済学の本だったので驚いたことがある。日本語に訳せば、「文化と発展」で、書店の勘違いから、医学書の棚に並ぶことになったのだらう。“development”は、医学領域でも、子どもが産まれるまでは、「発生」と訳されるので、面倒である。

われわれ母性領域の人間は、“reproduction”といえは、「生殖」と訳して疑わないが、経済学では、「再生産」で、この方が語源的には納得がいく。

「再生産」は、大辞泉によれば、「[名] (スル) 物質的財貨を生産し、分配し、消費することが不断に繰り返される過程。」で、要するに、あるシステムが、そのシステムの産物として、再現されることであろう。人口学では経済学とのつながりがつよいのか、「再生産」である。人口学用語辞典 (国際人口学会編、厚生統計協会1994) では、「再生産」は「人口置換」と同義で、平たく言えば、現代のおとなが産んだ子どもが、次の(生殖可能な)おとな世代になることであろう (人口学では、「生殖」にあたる英語は“procreation”である)。生まれる子どもの数だけでなく、大人になるまでのプロセスがそこには含まれる。

質的な側面では、当然「子育て」、「教育」と関連するし、reproductionを流れとしてみれば、「世代継承」ということになる。

現在、少子化の危機が叫ばれているが、これを「数」の問題と「質」の問題を結び付けて考えている人は少ない。“Reproduction”=「生殖」という狭い訳語に目をふさがれていないなら幸いである。



Bangladesh の子ども

写真提供 齊藤 進 (日本子ども家庭総合研究所)